

言語・文学とは何か？ 教育、とりわけ大学教育の対象となる言語・文学とは何か？  
(見取り図)

## 1. 分野の定義

- 言語・文学は、そのうちに広大で多様な学問分野を包含しているが、それ自体は学問の手前にある。それは人間の精神生活と社会生活の根底にあって、あらゆる学問そして文化の形成を可能にする基盤ないし土壌であると同時に、その活動によって生み出される文化的所産である。
- 人間は言語によって、自己と他者と社会と世界に関わる。言語は認識と行動を実現するためのもっとも基本的な道具である。学問として言語について反省的な考察を展開することとは別に、言語の運用能力を身に付け、さらにその能力を増進することを目指す実践的な活動が、当該分野の根幹をなす。
- 音声による言語活動は通常その場かぎりのものであるが、文字はそれをことばの織物(テキスト)として定着し、時と場所を越えて、言語活動の成果を伝えることを可能にする。これが文あるいは文書、さらには書物である。これによって、人間の表現能力は拡大し、遠隔的なコミュニケーションと知識の蓄積・伝達が可能になった。そのような文を読み解き、また書き記す能力を学ぶのが、ことばの最も広いそして根源的な意味における文学あるいはリテラシーである。より局限された意味での文学、すなわち芸術作品としての文学の読解と創作およびそれについての批判的な考察はもちろん本分野の重要な柱となる学科であるが、それに先立って、リテラシーの学習と修練が、本分野のもう一つの根幹となる。

## 2. 言語・文学に固有の特性

[言語・文学に固有の視点]

- 言語・文学が人間の営みのあらゆる局面に浸透して、その不可欠の構成要素をなしている以上、あらゆる学問は言語の行使を通じて自らの活動を展開し、その成果は文書によって表現され、研究・教育・学習の根拠と材料になる。しかし他の学問にとって、言語は活動の手段であり、文書は当該学問の遂行にとって必要な材料(情報、知識、ノウハウ)である。それに対して本分野にとって、言語・文学はそれ自体が実践と理論的考察の直接的対象つまり目他の学問の観点、さらに社会生活の観点からすれば、言語は自らの活動を行うための手段であり、その習得は学問の準備段階(予備学)に位置づけられる。予備学としての言語の学習と習得は本分野の重要な役割の一つである。しかし言語能力を磨き、言語表現の可能性をきわめることは、人間にとって本質的な欲求であり、その努力は人間精神を涵養し、より精緻で洗練された「高度」の文化を生み出す原動力となる。このような視点から言語を実践しまた考察することが本分野に独自の特性である。
- 文書の読解・作成能力は、社会生活・職業生活のあらゆる場面、ひいては学問にとって不可欠のスキルである。リテラシーの養成は初等中等教育の根幹

をなし、あらゆる学問分野で補助学として要請される。これも本分野の果たすべき役割の一つである。しかしリテラシーもまたそれ自体として果てしない修練の目標となる。このような修練の成果として生み出される文章は、必ずしも社会生活・職業生活・市民生活の課題に対処することを目的とはしない。むしろ実生活を支配している手段と目的の無限の連鎖を断ち切り、すべての属性を捨象した人生そのものの局面で、人に生きる力と生きる喜びを与える。これが芸術作品としての文学であり、これに対する強い関心に導かれて文学を实践しまた考察することが本分野に独自のもう一つの特性である。

以下は、「2. 言語・文学に固有の特性」の続きですが、上の記述とは独立した素描です。多様なアプローチに応じて、言語・文学の領域にどれほど多くの専門分野があるのか、ありうるのか、あるべきなのかについてのラフスケッチです。「定義」と「固有の視点」の方向性が確認されたあとで、新たに書き直します。

〔言語・文学の拡がり：多様なアプローチとそこから生ずるさまざまな領域〕

実践と理論：二つのアプローチ\*

- 実践：言語を学習し、それを使いこなす能力を養うこと。とりわけ書記言語によって織りなされる文（テキスト）をしかるべく読解し作成する能力（リテラシー）を磨くこと。
- 理論：言語・文学とそれに関連する事象を反省的に考察する活動。

\* 二つのアプローチは、それぞれ独立した学科（ディシプリン）として展開することもできるが、実際には両者は相互依存の関係にある。教育課程の編成に当たっては、この点を十分に考慮する必要がある。

\*\* 文学については、創作を教育する学科があることを考えれば、「創作」をもう一つのアプローチとして立てることも考えられる。あるいは、「文学」は、文学に関する反省的認識と作品を生み出す創作活動の両面があるとするか？あるいはまた「自国語」の学習・教育の一つの分科に位置づけるか？

実践部門（スキルの習得とその実践）

この部門は、一方では、学習・教育の対象となる言語の多様性、他方では、学習者と言語の関係の多様性に応じて、異なる領域が存在する。

- 自国語（日本語）\*：学習者が第一言語（母語）としてはすでに自然に身に着けている言語の運用能力をリテラシーの修練によって向上させることを主たる内容とする。その目標は、一方では言語の公共的使用能力を開発すること、他方では「高度」の精神文化の表現を可能にする言語を練り上げることである。
- \* リテラシーを養成するためには、学ぶに値する文を手本あるいは教材として用いなければならない。こうして言語表現の可能性を追求する（芸術作品としての）文学が教材の中核に位置することになる。リテラシーと文学を切り離すことはできない。

- 国際共通語（英語）：グローバルな局面で、文化と言語を異にする他者と協働し交流する道具となる言語を習得し、それを使いこなす能力を養成することを使命とする。
- 外国語：制度・慣習・文化等を異にする他国（他地域）の言語を学ぶことを通じて、世界の多様性の認識、異文化の理解を深め、よりよい国際理解・国際関係の構築を目指す。
- 古典語（自国の古典語も含む）およびそれに準ずる近代の有力言語（「文化語」？）：高度の学術・芸術を生み出すことによって後の時代、そして世界の他の地域に大きな影響を与えた文化圏の言語の学習。偉大な言語文化の所産の読解を通じて精神を涵養すると同時に、それを翻訳・翻案等の形でおのれの文化に移入・消化・変形することを通じて、受容する側の共同体（国・地域）の言語・文学の創造的発展に寄与することを目指す。
- 言語教育\*：以上の言語学習・教育を制度的に保証する、教育者の養成と教育法の開発。
  - \* 言語教育と文学：言語の学習がリテラシーの修練を含む限りにおいて、言語教育も文学と密接に結びついている。
    - 自国語教育
    - 外国語教育
    - 外国人に対する自国語教育

#### 理論部門

- 言語とそれに関連する事象を反省的に考察する学問：言語学。
  - 言語の構造、歴史、言語使用の在り方などに関心を寄せるのは文明化された人間の当然の欲求であり、その知識の習得や開発のためには自国語や外国語の習得が前提となる。
- 文学とそれに関連する事象を反省的に考察する学問：文学研究。文学テキストの生産・受容・解釈に関する理論的・批判的考察。それを踏まえての、文学の本性、文学が人生と社会にとってもつ意味と効用の探求。さらに、以上の考察と探求に導かれた創作の修練。
  - 文学あるいは文学研究が考察の対象とする文学テキストが何であるかについて、原理的な規定を与えることはできない。しかし文学研究の歴史と現状に即して、次の二つの立場を大別することができる。一方は、書かれたテキスト（文書・文献）の総体が考察の対象となるという立場であり、他方は、その総体のうちに文学作品というカテゴリーを措定して、それを主たる考察の対象とする立場である。文学作品とは何かという問いは、文学研究の重要な課題であるから、それにアプリアリな答えを出すことはできないが、常識的には、「想像力の力を借り、言語によって外界および内界を表現する芸術作品」（『広辞苑』）と解される。文献学に導かれる古典研究（西洋古典学、インド古典学、中国古典学、日本古典学等々）は前者の立場に近く、近現代

文学研究は後者の立場に立つことが多い。

- いかなる文書・文献も、いかなる文学作品もある特定の言語の織りなすテキストである。文学研究を行うためには、考察の対象とするテキストを十分に読みこなす能力を備える必要がある。文学研究は高度のリテラシーの修練と切り離すことができない。この意味でも、文学と言語は一体である。ちなみにイギリスにおいて **English** (英語) というディシプリンが、「文学と言語の厳密かつ批判的な学習を特徴とする汎用的な専門科目」と定義されていることは示唆的である。
- 文学作品が特定の言語と緊密に結びついていることが、言語別の専門科目（日本文学、中国文学、英米文学、フランス文学、ドイツ文学、ロシア文学等々）の存在理由である。それぞれの科目において、当該言語の高度なリテラシーの教育が並行して行われることはいうまでもない。
- しかし文学作品は読者にとって未知の言語で記されている場合にも、翻訳や翻案を通じて受容され、読者に文学としての感興と感動を与える。言語と表裏一体でありながら、言語を超える文学のあり方とその意義の探求も文学研究の一環をなす。この問題は外国文学研究の重要な課題であるが、これに特化した独立した専門学科（文芸学、比較・一般文学、翻訳論等）も立てられているし、また立てることができる。
- さらに文学は、言語以外の表現媒体（音声、身体表現、イメージ）の力を借りて、他の文化的産物（演劇、映画、劇画・漫画等）に脚色される。文学がそれらの産物の骨組みを形作っている限りにおいて、これらもまた文学研究の対象である。学際的な表象文化研究やカルチュラル・スタディーズにおいても、文学研究はその不可欠の構成要素である。